**「思い」を表し、また、理解する：時枝誠記「言語過程説」と言語行動学**

**氏家洋子**

**[概要]**

Humboldtが言語と精神活動の相関を説いて以来、言語と人間活動の相関への関心は、言語を混質的なままに全的に捉えるべきとのBunge(1984)による主張へと続いている。日本語を第一次的研究対象とする言語行動学の構築に向けて、言語を言語行動と捉える「言語過程説」(時枝1941)を取り上げたい。ここでは言語とは表現し、また、理解する、過程または行為・行動そのものであり、心理・生理・物理的活動である。話し手は「思い」を自身の概念化作用と意味作用を経て、自身の「場面」において特定の心的状態の下、表現し、また、聞き手はそれを自身の連合作用を通し、同じく自身の場面において理解する。『国語学原論 続篇』(時枝1955)では、人は言語行動を取り相手に働きかけ、対人関係を構成、相手の行動を左右し生活目的を達成するとし、人間生活全体と交渉・連関する、最も基本的な生活として「言語生活」なる概念を提唱。神経学者Jackson(1878)によるproposiotioniseする力の喪失が同時に意志的行動を不可能とすることの発見、心理学者Vygotsky(1934)による幼児の意志的行動が自己中心的発話に続くことの発見等と、言語を有目的的・意志的行動と見る点で符牒を合わせる。

日本語で、「思い」は概念化の過程を経た「客体的表現」と、表現主体の認識の直接的表現である「主体的表現」とを併せて表現される。日本語では主体的表現の言語記号化が発達しており、主体的表現化の深化も見られる。一例として対者敬語(デス、マス)は他言語にはほぼ不在、欧州語で相等語とされていたものは呼びかけ語等の客体的表現であり(Comrie,B.1976)、欧州語文法の書き換えに至った(Levinson,S.1983)。さらに、日本語に見られる、発話時に話者のそれ以前の一定の時間にわたる認識内容を併せて示す「含過程構造」(ヤハリ、～ノデス等)に相当するものが欧州語では周辺言語や従属節等を使って表わされる(氏家1996, 2011)。上述の対人関係構成時に主導的役割を担うのはこれら主体的表現である。日本語を言語行動として研究する際、主体的表現を軸とする分析が極めて有効な所以である。

現在、日本で盛んな語用論、談話・会話分析、言語行動研究等は主に欧米での研究の流れを汲むが、言語を具体的、また、総合的に捉えようとする点で言語過程説はこれに遥かに先行しながら放置されて来た。日本語を第一次的研究対象として、人間の言語行動の普遍性・特殊性を明らかにして行くためには言語過程説、主体的表現等の意義を汲み取り、さらに、非欧州語の場合との対照研究を進めることが必須である**。**